

「今日も変わりねえすか」舞根  
第一行政区長の畠山優さんは、  
震災発生から毎朝、地区の人た  
ちの安否を一軒一軒確認して回  
り、その足で地区民の避難所に  
顔を出すのが日課だった。水道  
電気のライフラインが復活する  
まで50日間それは続いた。避  
難所回りは避難所が閉鎖され  
るまで続いた。ちなみに、優さん  
の自宅は無事で、彼は所謂(仮  
設住宅住民でない)「在宅」の人  
だ。

夏が終わり、同区の住民から  
高台移転事業の話が出ると、優  
さんは「舞根1区高台移転推進  
委員会」会長に就いた。同事業の  
仕切り役に、在宅の人が就くの  
は珍しい。むしろ在宅の人は、同  
事業には疎遠になるケースが多  
い。では、なぜ彼は高台移転に積  
極的なのか。

話を聞くと、「高台移転」だけ  
ではない「新しい町づくり」を見  
据えた優さんの想いが見えてき  
た。

### 限界集落造成事業？

現在、移転の話を進めている

### 隣接地区の連携を

ではどうすればいいのか。

「高台移転に適した場所があ  
るなら、隣接した地区の人たち  
も、みんなして力を合わせて新  
しいコミュニティ・文化づくりな  
のさ」つまり移転用地の開放だ。  
優さんは舞根・宿浦海岸で共に  
暮らしてきた人たちの高台移  
転を目指している。

ちなみに鮎立地区の高台移転  
についても同様の声は出ている。  
北は舞根・宿と連携し、南は小  
鮎と連携し、移転用地を共有し  
ようという意見だ。

今さら連携なんて無理だとい  
う反対意見ももちろんある。  
「(反対意見も)否定はできない  
んだけど、今後その集落でが  
んばって生きていく(若い)人た  
ちのことを考えると、もっとも  
つといるんな方々から力や情報  
をもらったりして、そしてこの  
機会だからこそ、新しい町を新  
しいスタイルでつくっていかねえ  
と、と俺は思うのさ」

市に提出した要望書には、  
「新しい町づくり」に必要な最低

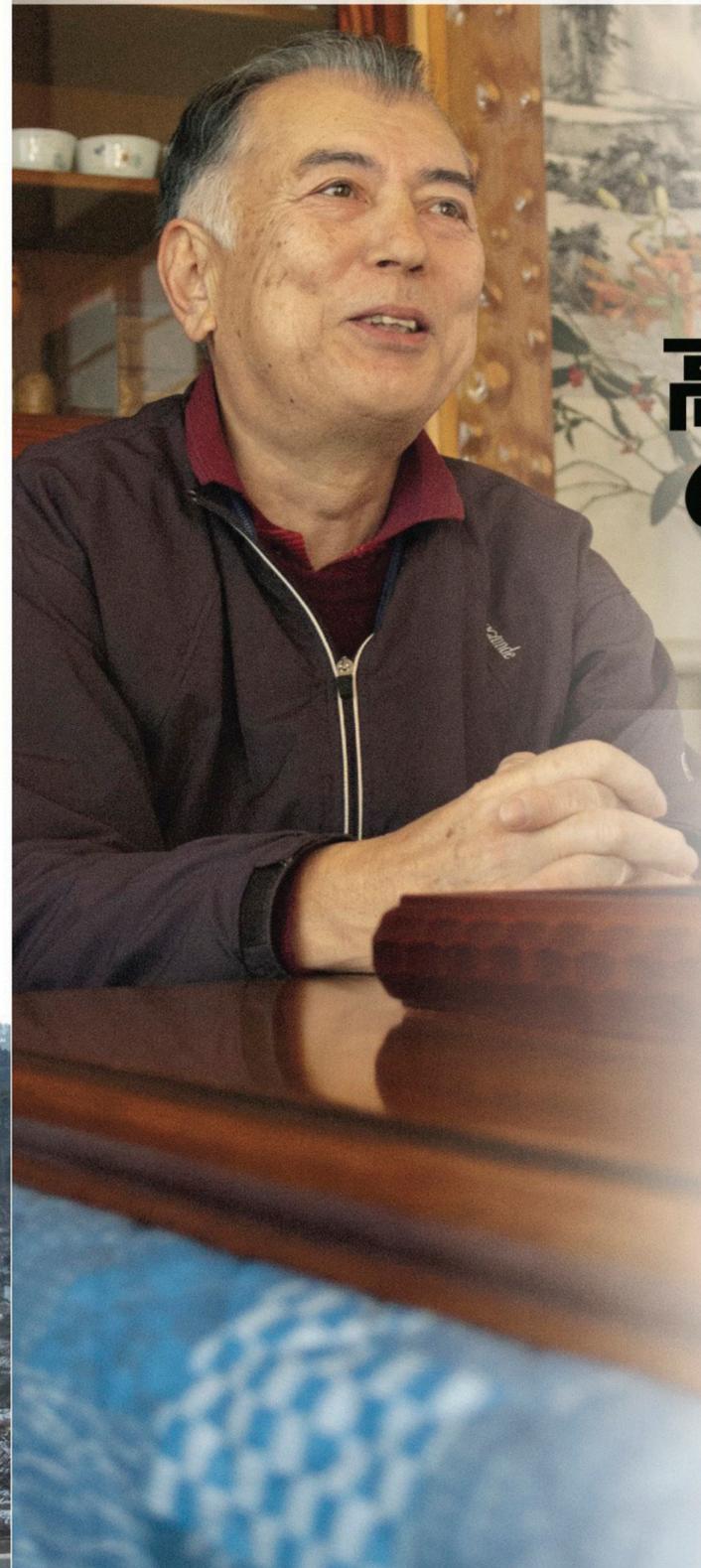
畠山優  
MASARU HATAKEYAMA

# 被災者だけ 高台移転だけ の問題でない

舞根 新しい町づくりのために  
家の有無・地区の違いは超えよう

地区は、それぞれ地区ごとに移  
転用地を検討している。〇〇地  
区は〇〇の高台、△△地区は△  
△の高台という風に、「各集落」  
とに文化・歴史・コミュニティを大  
事にしようという想いがある。  
しかし、被災した住民全員が移  
転できる訳じゃない。(集落の規  
模は)半分になっからね。そう  
すると、そういう文化やコミュニ  
ティを継承させるのも難しくな  
る。優さんはそう指摘する。具  
体例を挙げよう。舞根1区は5  
9軒中43軒が被災、そしてその  
内20軒が移転を希望している。

つまり、移転先の軒数は元の半  
分以下になる。  
さらに問題なのは年齢。移転  
希望者の多くが高齢者だ。  
「やっぱり年齢だな、ハンデは。  
移転はスムーズにいつても3年  
はかかる。そしたら俺も69歳  
になる。古希だよ。昔からの人  
たちだけで高い所でひっそりと  
暮らしをしようとしても、20  
年後30年後には集落にはなん  
ない。高台移転事業は、限界集  
落造成事業になりかねねえ」  
彼は鋭く警鐘を鳴らす。



限の条件が盛り込まれている。  
復興住宅(公営のアパートや戸  
建て)の建設をはじめ、道路整備  
防災機能つき集会所、排水機能  
の整備などだ。

### 「在宅」の協力が必要

限界集落をつくらないために  
も、地区の壁を越え、新しい町づ  
くりを目指す。この構想には、  
「在宅」の人の協力が欠かせない。  
「高台移転」新しい町づくり・  
町おこしは、単に被災者の問題

でない。その地域の歴史だの文  
化だのコミュニティだのは、みん  
なして継承・発展させていかな  
ばダメなのさ。この集落では俺  
は「在宅」の人間だけれどもお  
世話すつから、となつた「みんな  
で知恵の出し合うこと」こそ、実  
は一番の近道なのかもしれない。

### ある後ろ姿

町づくり・町おこしに必要な  
3つの「もの」がある、とよく言わ  
れる。しがらみにとらわれず外  
部からの新しい価値観やアイデ  
アを取り入れる「よそもの」、  
バカみたいにそれに向け、がむし  
やらになれる「ばかもん」、新世  
代を担う若いエネルギーな  
「わかもの」のことだ。『3もの』  
が揃わねえと、新しい町は生ま  
れねえ。優さんは、いろいろな立  
場の違いを越える必要性を説く。  
新しく、強く、若い風が復興に  
は必要だ。

「移転だけでは新しい集落は  
つくれねえ。移転後、どうい  
う暮らし・町並みにするのか、夢  
をもって、今から考えていかな  
えと。(将来)自分たちの住むと  
ころだもん」新しい集会所から

新しい公園づくりまで、優さん  
は思いを巡らす。自由にポジテ  
ィブに思い描く。「おもしろく  
発展させていく。かえってそう  
いう夢がある方がおもしろい  
ちゃ」

地域のために動く彼の原動力  
は何なのか。そこには、半世紀近  
く町役場で勤めあげた過去があ  
った。「役所っていう固いところ  
にいて、みんなにお世話しても  
らつた。その恩返しだ。(地域の  
ことは)自分のことのように。兄  
弟みたいなもんだよ、この  
コミュニティは。(高台移転事業  
の会長という)任務を与えられ  
てるんが、生きがいだと思っ  
てっから」

同時に、ある光景が優さんの  
頭をよぎる。「朝と夕、仮設から  
(舞根の)海沿いまで散歩に来る  
人がいてね、その人が変わり果  
てた町を眺めてるんだよね。そ  
の後ろ姿を見るとねえ」  
彼はその後ろ姿に応えるべく、  
高台移転に想いを馳せているの  
かもしれない。

## 移転用地の開放— よそもの・ばかもん・わかもの みんなして 夢をもって 地域のコミュニティを継承・発展させる



シリーズ②につづく—